

田能村竹田における「懐友」

常葉学園大学 日比野 秀男

田能村竹田（1777－1835）は豊後国岡という九州の片田舎に生まれた。普通であれば田舎の小藩の藩医あるいは学者として生涯を終わるはずであったが、彼は実に数多く京坂と往復し多数の師友を持つことができた。その成果は『竹田荘師友画録』として結実している。そこには 105 人の画人が収録されており、北は奥州から江戸、京坂、山陽、四国、九州一円と幅広く交友を結んでいたことが知られる。

竹田の研究は、その作品が人々に愛好されたこともあって数多くなされている。近年の佐々木剛三、宗像健一、高橋博巳、黒田泰三氏らの研究は、竹田の生涯、思想、芸術などあらゆる面からのものである。特にその画業は京坂、長崎、山陽など各地の文人や画家との交流から影響を受け、長崎における中国画の影響が文政末年から天保初年にかけての竹田様式の完成に大きく影響したと考えられている。

各地の師友との交友が多いということは当然ながら依頼画が多くなることでもある。また友人に与えるために制作した作品も多くなっていった。中でも頼山陽との交友は特に深く、竹田が大坂の医師・松本酔古に与えるために制作した「亦復一楽帖」の賛を山陽に求めたところ山陽がその作品に感動し我が物としてしまったという逸話は両者の交友の深さを伝える以上に互いがそれぞれの価値を如何に認めあっていたかを示してもいる。また、竹田は山陽の題画詩文を高く評価し山陽によってはじめて中国宋・元の題跋の趣が日本でも見られることとなったとしている（文政七年十一月十七日付け、亀山夢研宛書簡）。さらに山陽以外の着賛は断る（「雲山図巻」）とまで記している。

天保三年、頼山陽に贈るために制作した「松巒古寺図」（東京国立博物館蔵）は豊後国岡から京都に向かって持参し中津滞在中に山陽の死を知り青木木米に転贈されたものである。山陽に題画詩文を書いてもらうため自ら持参していたのであるが、それが山陽の死によって叶えられなかったのである。この作品は描かれた内容から山陽に対して岡への「招帰」を意味しているものと考えられる。これは取りも直さず竹田の心中には「懐友」の思いがあったからである。この発表では、これまで「自娛」あるいは「適意」の画家として論じられた竹田の作品の描かれた内容や贈呈先などについて分析し、室町水墨画の詩画軸の「懐友」の意味をどのように込めたのか、また彼の作品にはどのような特質があるのかなどについて論じることとしたい。